

日本での二度目のリサイタルツアーに寄せて



ジラルデッリ青木美那
ヴァイオリニスト

ただいま、日本。

昨秋からマーストリヒトで大学生になりました。ベルギーの高校とオランダの音楽院を行き来しての両立が大変だった去年と比べて、今年ようやく音楽だけにどっぷり浸かる生活になり、毎日がとても刺激的です。プロフェッショナルな環境で、自分と同じように音楽に対する情熱を持った人たちと共に勉強し、考えや感情を話し合ったり、共有できるようになったことは非常に貴重で、そのような環境に身を置くことに大変感謝しています。

マエストロとのレッスンでは、演奏の技術や音楽家としてのプロ意識を徹底的に叩き込まれます。しかし、もっと重要なこと、より深い音楽性を追求し、自分に問いかけ、自分のものと言える音楽を生み出すことを要求され、常にもっと高いところにハードルがあります。

先日、マーストリヒトで最も重要な劇場、ブライトホーフ劇場で演奏する機会をいただきました。

その時、おそらく生まれて初めての経験をしました。何かを掴みかけたような気がしたのです。私には、演奏する曲に対する自分の考えをみてもらいたいという、欲望のようなものがいつもあります。しかし同時に、その考えを外に出そうとすると、どうもうまくいかない、というジレンマをずっともっていました。

しかしその日、今回のプログラムの最後の曲でもある、サン＝サーンス「序奏とロンド・カプリッチョーズ」を弾いた時、どうみられるかとか、どういう風に思われるかを考えないで自由になれたような気がしたのです。この見えかけたものを追求したい。今回のリサイタルツアーで、それをもっと突き詰められるのではないかと期待しています。その経験を、みなさまと分かち合えたらと思っています。

今年のプログラムでは、超絶技巧を存分に見ていただくものだけでなく、深い悲しみや激しい情熱のような、より高度で複雑な音楽的表現が要求される曲目を選びました。これは、私にとって技術的な課題よりも難しい挑戦です。自分の音楽性において、できる限り自由で誠実でありたい。フレーズを形づくるひとつひとつの音に、意思と意味を持たせたいと思っています。

ぜひ、お越しになってお聴きください。

■ミーナの本格的デビューに寄せて

佐藤卓史（ピアニスト）

2019年、シエナ・キジアーナ音楽院のマスタークラスに現れた当時14歳の少女ミーナ。即座にその才能を見抜き、マーストリヒト音楽院の特別クラスに迎え入れたボリス・ベルキン教授の慧眼には感服するばかりだが、果たしてここまで短期間で急成長を見通していたのだろうか。

2022年6月には京都と東京の3つの小規模な会場でリサイタルを催した。同じステージに立ちながら、1公演ごとに精度を増し、ぐんぐんとグレードアップする様子には驚くばかりだった。7月のローマ楽器博物館でのリサイタルではまた新たなステップに立ち、アーティスティックな課題に向き合う姿が見られた。その急激な進化には、「若さ」というだけでは説明できない、ミーナの根底にある直感力や洞察力が関係しているのだと思う。

今年は、日本の本格的なコンサートホールで初めてのリサイタルに臨むことになる。ヴァイオリンの大好きな少女から、真の芸術家への階段を昇り始めたミーナ。もしかしたら私の見ていない間に遙か高みへ到達しているかもしれない、という期待と畏れを抱きながら、今年のツアーでの共演を楽しみにしている。